

アマルティア・セン著「貧困の克服 - アジアの発展の鍵は何か - 」

集英社新書、集英社 2002 年 1 月 22 日刊を読む

## アジアの発展の鍵は何か

### 日本の経験——公共活動と個人のチャンス

1. これは発展途上国すべてについて言えることですが、社会的チャンスを創出するための公共政策の推進はきわめて重要です。なぜなら、社会的チャンスを均等に分かち合うことができれば、多くの人々が経済拡大のプロセスに直接参加することが可能になるからです。
2. 日本の成功の経験と、それに続く東アジア、東南アジアの成功によって、いくつかの政策サークル、特に欧米の政策サークルなどでずっと支配的でありつづけた見解で、しばしば議論の余地がないとされてきた通念が覆されました。その通念とは、人間的発展というものは、その国が豊かになってはじめて手にすることができる贅沢品であるとする考え方です。東アジア経済が近年になって獲得した成功モデル——そのはるか以前に日本ではすでに始まっていました——が与えた最大の衝撃はおそらく、そのようなどうしようもない偏見を完膚なきまでに打ち破ったことでしょう。
3. これらの経済は比較的初期において教育の普及を徹底するなど、さまざまなエンタイトルメントを拡大させるための政策によって、多くの人々が経済活動と社会変革に参加することを可能にしたのです。このことは、社会全体が貧困の束縛から解放される以前にもうすでに生じていました。そしてまた、この幅広い取り組みは実際に、貧困による束縛に打つ勝つものにも大きく貢献したわけです。
4. ここで、日本の場合を考えてみましょう。十九世紀半ばの明治維新当時のことです。ヨーロッパが 1 世紀をかけて経験してきたような近代的な工業化や経済発展は、日本ではまだ緒についたばかりでした。それにもかかわらず、日本人の識字能力の水準はヨーロッパを凌駕していました。明治時代(1868 ~ 1911)における日本の発展初期においては、このような人間の潜在能力の発展が主眼とされました。たとえば、1906 年から 1911 年にかけては、日本全国の市町村予算の 43 % が教育費にあてられていたわけです。
5. この時期における日本の初等教育の普及はたいへん急速でした。1893 年には徴募された兵士の 3 分の 1 が識字能力を持たなかったというのに、1906 年頃になると、読み書きのできない者はほとんどいなくなっていたという事実、陸軍の徴兵担当官たちが感銘を受けています。1913 年頃の日本は、経済的にはまだ発展途上にありましたが、書籍出版に関してはもうすでに世界一

になっていました。出版点数ではイギリスを抜いており、アメリカの 2 倍以上にも達していたのです。

6 . 日本では、非常に早い時期から学校教育の普及と人間的発展を優先させてきましたし、今日においても、そのことに変わりはありません。ただ、ここで心にとめておかなければいけない重要な事実は、それが百年以上も昔に遡るということです。それらは、日本が豊かになってからはじめて導入されたものではありません。これに倣って、発展のために何よりも最初になされるべきは、金持ちや地位の高い人々のためにではなく、むしろ貧しい人々のためになるような、人間的発展と学校教育の普及の実現です。これは、近代史全般をつらぬく日本経済の発展戦略を理解すればわかることです。

7 . 東アジア、東南アジアの地域全体において、その進展ぶりはしばしば遅れがちでゆっくりしていますが、教育と人間的発展の優先を見ることができます。韓国、台湾、香港、シンガポール、タイその他の国々において、そしてさらに特筆すべきことに、中国においても、この一般的な取り組みがたいへん巧みに活用されているのです。

P23 ~ 26

#### [コメント]

人間の生活のために何が必要か。その第一は教育であることがよくわかるセン先生の講演速記録。

- 2011年7月24日 林 明夫記 -